

第 1 章

土台づくり編

1 教育ファームとは何か？

(1) 教育ファームの意義・目的

今日、生産現場と生活の場の距離が広がり、子どもだけでなく大人を含めた消費者の多くが、自分の食生活が自然の恩恵や食に関わる人々の活動に支えられていることを実感しにくくなっています。

こうした中、食料の生産から消費までの食に関する様々な体験活動を行うことは、食に関する知識と食を選ぶ力を習得し、健全な食生活を自ら行うことができる人間を育てる「食育」を推進する上で重要です。

このため、食育基本法（平成17年法律第63号）、食育推進基本計画（平成18年3月食育推進会議決定）及び第二次食育推進基本計画（平成23年3月食育推進会議決定）において、農林漁業に関する様々な体験の機会を提供する教育ファームの取組が、農林漁業者など（以下、生産者）が行う食育の推進に関する活動として位置付けられています。

教育ファームとは、一時的なイベントではなく、生産者の指導を受けながら、大人も子どもも一連の農作業などを体験することで、「食生活が自然の恩恵の上に成り立っていることや食に関する人々の様々な活動に支えられていること等に関する理解を深める」などの効果が発揮される農林漁業体験活動です。

教育ファームでの体験をきっかけに、将来農業をやってみたいと興味を持ち始める例もあり、教育ファーム活動は農業の魅力を発信する後継者発掘の機会にもなり得るのです。

(2) 教育ファームの取組

このように、教育ファームの取組は、活動を通じて、食生活が様々な活動に支えられていることを理解してもらうことを期待するものです。土づくり・種まき・収穫といった農林漁業体験だけではなく、調理・加工・味わいといった食体験も一緒に行うことが望ましいでしょう。これらの体験の中で、農業・農村が洪水防止、生物多様性保全、伝統文化の継承など多くの機能を持っていること、環境に調和した農業、地域の食文化の継承、地産地消など、様々なことを伝えることができます。

また、生きもの調査といった環境体験、田畑や水路の歴史などを伝えるふるさと学習などを通じた地域への理解、子育て世代・世代間交流や地域間交流などとも組み合わせると、理解はさらに広がります（図1-1）。

図 1-1 農林漁業体験から広がる様々な取組



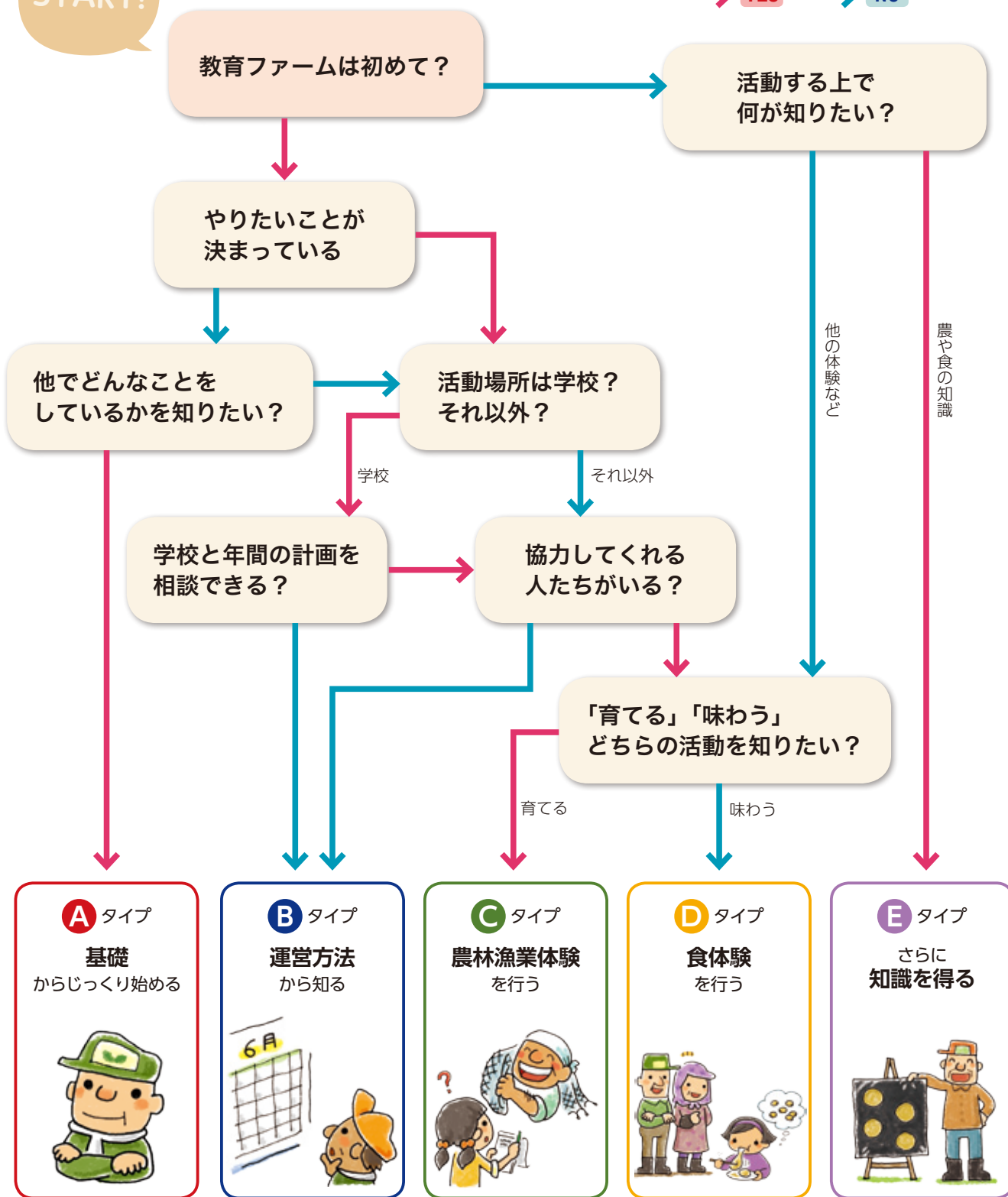
何から始める？ 教育ファーム

あなたのタイプがわかる YES・NO チャート

教育ファームを始めるにあたって、何から始めようかと迷っていたら、この YES・NO チャートでタイプ診断を。教育ファームを実施する上で何が必要かがわかったら、ぜひそこから始めてみてください。取り組むことで経験値はどんどんアップします！

START!

→ YES → NO



基礎からじっくり始めるAタイプ

教育ファームを始めたくても、まだ実際にどうすればよいのか分からないあなたには、基礎からじっくり始めるのがおすすめ。教育ファームの形態や実際の活動事例が分かります。主に学校で実施する【学校型】、年代に関係なく参加してもらう【一般参加型】があります。

このページから読むのがおすすめ！

・教育ファームとは何か？→ [8ページ](#) へ

・教育ファームの形態→ [12ページ](#) へ



運営方法から知るBタイプ

やりたいことは決まっても、「どうやって立ち上げればいい？」「運営費はどうする？」などの疑問があるあなたには、運営方法から知るのがおすすめ。構想から、圃場の確保、連携先、運営上の課題などが分かります。

このページから読むのがおすすめ！

・教育ファームの運営の仕方→ [14ページ](#) へ



農林漁業体験を行うCタイプ

「田んぼ・畑で栽培体験をしてほしい」「学校園で栽培指導を頼まれた」などと、農林漁業体験をすぐに始めるあなたは、プログラムの立て方を含めた農林漁業体験の進め方から知るのがおすすめ。事故を防止するための安全対策についてもしっかり考えます。

このページから読むのがおすすめ！

・農林漁業体験の進め方→ [20ページ](#) へ

・農林漁業体験における安全対策→ [34ページ](#) へ

・体験の事後評価等→ [48ページ](#) へ



食体験を行うDタイプ

「収穫物で調理体験したい」「せっかくだから加工体験も」と、食体験も始めようとするあなたは、食体験の進め方から知るのがおすすめ。ケガや食中毒を防ぐための安全対策についてもしっかり考えます。

このページから読むのがおすすめ！

・食体験の進め方→ [37ページ](#) へ

・食体験における安全対策→ [45ページ](#) へ

・体験の事後評価等→ [48ページ](#) へ



さらに知識を得るEタイプ

農や食に関する基礎知識と関連する取組事例を紹介しています。農業や農村の多面的機能や食品の安全性などについて簡単にまとめているので、これらを参考に教育ファームをより効果的なものにしましょう。

このページから読むのがおすすめ！

・農を知ろう→ [54ページ](#) へ

・食を知ろう→ [61ページ](#) へ



2 教育ファームの形態

教育ファームは、農林漁業体験を行う場所、参加者の年齢構成、参加形態の違いなど様々ですが、【学校型】【一般参加型】の大きく二つの型に分けることができます。それぞれの特徴を紹介します。

(1)【学校型】

【学校型】とは、小学校、中学校、高等学校などの学校教育で、児童、生徒を対象に授業時間などを活用して農林漁業体験を行うものです。

食育活動に取り組む学校の中には、教育ファームのような農林漁業体験活動を取り入れていると

教育ファーム活動例 1 【学校型】

団体名 くれき野生産組合（長野県松本市）

目的：稲作りを通して、田んぼの生きもの、生命の大切さ、地域農業・資源の存在について学んでもらう。

実施主体：生産者27戸による組合

参加者：小学5年生 約70人（2～3クラス）

実施回数：年間5～7回

実施場所：小学校から徒歩10分の田んぼ（学校の敷地外。広さ2a程度）

資材：立ち上げ当初は、組合や学校が持っている資材を使い、特に購入したものはなかった。田んぼの生きもの調査のために捕虫網を買い足したり、昔の農具体験のために地域で余っていた農具を譲り受けるなど、毎年工夫を重ねている。肥料については購入もするが、牛ふん、鶏ふん、もみがら、米ぬかなども活用している。

運営費の主な財源：市の地産地消食育推進事業費を活用し、苗代、トラクターの使用料、労賃などをまかなっている（立ち上げ時は特に、助成金の情報を主催者自身で探しに行くことが大切で、実績がつけば情報が入ってくるようになる）。

特 徴

- ・総合的な学習の時間を活用して農業体験を行う。
- ・1人1列を自分の稲（マイイネ）として名札を付け、種もみ播きから収穫まで一貫して行う。
- ・田植え後は、子どもたちが交代で田んぼに通い、水管理を行う。水温、草丈計測などを記録する。
- ・脱穀は、昔の農具（千歯こき、足ふみ脱穀機）と今の農具（ハーベスターなど）の両方を体験し、農業技術の進歩を理解する。

（本事業で行われた調査より）

ころが多くあります。子どもたちは、授業の中で、生産者の指導のもと、種まきから収穫までの一連の農作業などを行うことで、豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていきます。

小学1・2年生では生活科、小学3～6年生・中学生・高校生では総合的な学習の時間に組み込まれることが多く、大豆栽培～味噌づくり体験、水稻栽培～わらを使った加工品製作も行われます。

また、保育園、幼稚園、こども園では、毎日の活動の中に農作業が組み込まれていたり、給食の時間などを利用して食育を行ったりする場合も多くあります。

(2)【一般参加型】

【一般参加型】は、年代に関係なく参加者を募集して農林漁業体験を行うものです。消費者が地元の活動に参加したり、都市に住む消費者が農村まで足を運んだりして農林漁業体験を行うため、生

教育ファーム活動例 2 【一般参加型】

団体名 ぼくらの農園（埼玉県入間市）

目的：農業の楽しさ、面白さとともに、大変さを知ってもらい、農業のよき理解者になってもらう。

実施主体：生産者1人（30歳代）

参加者：大人（50歳代以上）が中心の家族、約60組

実施回数：年間16回（月1～2回、2時間程度。土曜・日曜の2日間開催し、どちらかの日に参加する）

実施場所：生産者の畑（広さ24a程度）

資材：立ち上げ当初に、すき、クワ、ジョウロ、シャベルを購入し、参加者に貸出。必要に応じて支柱や防虫ネットなどを買い足している。

運営費の財源：参加費（年間3.5万円／1区画）

特 徴

- ・就農の時から、消費者との交流に関心があった。
- ・3月から作業を開始し、春から夏にかけてジャガイモ、レタス、キャベツ、ダイコンなどをまき、6月に収穫する。7～8月でネギ、ハクサイなどをまき12月に収穫する。
- ・野菜作りの作業と講習会を併せて行う。講習会では農政に関する問題も扱う。
- ・教育ファームの取組を始める前に、すでに実施している団体で研修を受けた。
- ・生産者の畑でできない体験は、他の団体等と連携し体験を行っている（希望者のみ参加）。

□ 研修を受けた団体と協働して、長野県の田んぼで稲作体験を行う

□ 市内の大豆農家に、場所や器具の提供等を依頼し、味噌づくり体験を行う

（本事業で行われた調査より）

表 1-2 年代による参加形態

参加者の年齢層	参加形態
幼児・小学生	家族（父母・祖父母などの保護者）、 友人同士（小学校中学年以上）
中学生・高校生	家族、友人同士 ※他年代と比べ少ない
大学生	友人同士、個人
30～40 歳代（子育て世代）	家族（幼児・小学生の子ども）
60 歳代以上（シニア世代）	夫婦、友人同士、家族（3 世代）

産者と消費者の交流を深める場としても期待されています。親子、友人同士など、参加者の年齢・年代によって、参加形態は様々です（表 1-2）。家族やグループでの参加が主流ですが、企業研修の場として利用されることもあります。参加しやすさを考え、休日に体験活動を行う傾向があります。

3 教育ファームの運営の仕方

生産者は、よりよい農林水産物を作ることが本来の使命であることを念頭に、教育ファームで誰に何を伝えるのか、しっかりと考えることが重要です。

ここでは、立ち上げ方から実際の運営について、一般的な手順に沿って解説します。必ずしも順番通りに進める必要はありませんが、少しずつ具体化していくことが重要です。

（1）立ち上げ方

立ち上げ方の流れは、【学校型】と【一般参加型】で少し異なります（図 1-3）。それぞれの重要なポイントを示します。

STEP 1 構想を整理する

教育ファームの運営には、誰に何を伝えたいか、どのように体験をしてもらいたいかということ、初めにしっかり考えることが重要です。

教育ファームの参加者は、年齢や経験も様々です。基本は、一連の体験を通して農林漁業への理解、食への関心を深めることですが、参加者によって、理解の度合いやできる作業も異なりますので、留意しましょう。

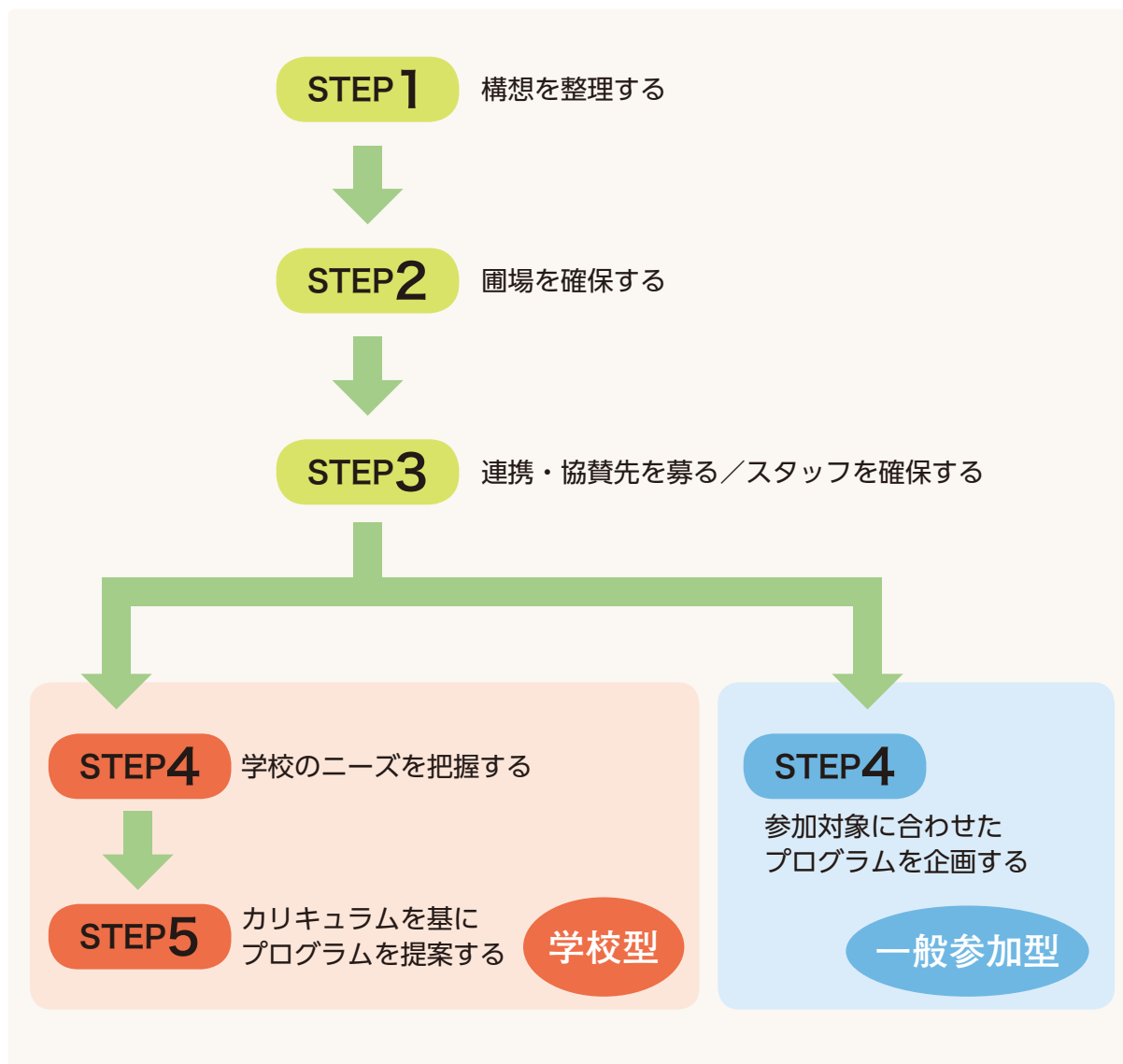
〔参加者に伝えたいこと（例）〕

未就学児童（幼児・幼稚園児・保育園児）：土に触れる楽しさを感じてもらいたいなど

小・中学生：生きものを育て、命の大切さを学んでもらいたいなど

高校生・大学生：食と農、環境を巡る現状に問題意識をもってもらいたいなど

図 1-3 立ち上げ方の流れ



大人（子育て世代、シニア世代など）：農家との関わりを持ってもらいたい、農林漁業の現状を知ってもらいたいなど

STEP2 圃場を確保する

【学校型】では、学校に田畑があるのか、学校近隣の田畑を借りられるかがポイントになります。また、限られた授業時間の中で実施しますので、学校からの移動距離は短い方がよいでしょう。

一方、【一般参加型】では、生産者自身の田畑の提供、遊休農地の活用などが考えられます。

また、暑い時に休める木陰、手を洗う水道やトイレなど、圃場以外にも必要な設備が整っていることが望ましく、参加者の目線に立って圃場を決めることが大切です。圃場の近くにトイレがない、または新しく設置するのが難しい場合もあります。役場、公民館や公園など、近くで使わせてもらえる施設がないか調べ、事前に相談してみましょう。

適切な圃場がない場合は、地域の方、農業委員会、JAなどに、農林漁業体験に適した圃場がないかなどを相談することも考えられます。

STEP3 連携・協賛先を募る／スタッフを確保する

教育ファームをひとりで運営するのは困難が伴います。一緒に活動を進める仲間を見つけましょう。

実際には、運営主体（生産者自身）が単独で行うのではなく、地域の他の生産者、行政、教育委員会、PTA、自治会、JAなどと連携して活動することがほとんどです。

また、生産者と学校や企業の間に入ってコーディネートしてくれる人材が確保できれば、学校との調整、参加者募集のための広報、企業との連携などをスムーズに進めることができるでしょう。コーディネータ役になる地域の食育実践者やNPO法人があれば相談してみましょう。

体験プログラムが確定した段階で、必要なスタッフが揃っているか確認する必要があります。必要なスタッフを確保するため、地域の生産者、高校生、大学生、JAや行政の職員が指導の補助を行う事例もあります。また、取組内容によっては、食文化や自然環境に詳しい人または専門家にも声をかけ、協力や相談を依頼するのもよいでしょう。軌道に乗り出したら、リピーターの方がスタッフになってくれる場合もあります。

STEP 4からは、【学校型】と【一般参加型】に分けて説明します。

→学校型 STEP4 学校のニーズを把握する

意外と忘れがちなのは、学校教育での農林漁業体験の位置づけや、学校のニーズを把握することです。生産者の一番伝えたいことが、学校や子どもたちの望んでいることとは限りません。いかに調整をはかっていくことができるかが、重要となります。

学校が農林漁業体験に期待することは、たとえば、自然・生きもの・食べものを大切にする気持ちを持てるようになること、農業への理解と問題意識が生まれること、作物を収穫する喜びや充実感を持てるようになることなどがあります。学校が何を望み、子どもたちに何を伝えたいのか、予めよく確認することが大事です。

→学校型 STEP5 カリキュラムを基にプログラムを提案する

学校のニーズを把握したら、実際にどの授業でどれくらいの時間が使えるのか、学校の先生とよく話し合いながら、体験内容（プログラム）を提案しましょう（18ページ参照）。

→一般参加型 STEP4 参加対象に合わせたプログラムを企画する

参加対象の年代に合わせたプログラムを企画することが大切で、農林漁業体験だけではなく、調理・加工・味わいといった食体験も一緒に行うことが効果的です。

親子や子どもが対象ならば、興味を切らさずに年間を通して継続的に参加できるプログラム、たとえばゲーム形式で楽しめる内容を盛り込む、また、大人が対象ならば、農業への理解につながる話などを織り交ぜた講習会を行う企画も考えられます。

また、実施後の参加者の意見も、プログラムの改善につながります（48ページ参照）。さらに、実際に教育ファームに参加し、参加者の立場を経験することも、具体的な体験内容を検討する上で大変役に立つでしょう。

以上の各STEPで、構想から企画までが固まれば、次は、【学校型】【一般参加型】それぞれの実情に沿った年間プログラム、1回毎の体験プログラムをつくります（20ページ、24ページ、37ページ参照）。

（2）運営について

活動を始める前も、始めた後でも、教育ファームの運営では、様々な面で悩みながら、活動を継続しているのが現状です（表1-4）。

● 運営資金の調達方法について

運営には、農林漁業体験時に必要なものの購入費だけでなく、調理等の食体験時に必要なものの購入費、参加者の保険料など、様々な費用がかかります。教育ファームの実施者はそれぞれ工夫しながら、これらの運営費を確保しています。

財源としては、参加者から徴収する参加費のほか、学校の食育予算、企業・団体からの協賛金、行政からの補助金、自主財源があり、これらを組み合わせているところもあります。

● 運営資金確保のための工夫

【学校型】では、教育ファームのための予算が少ない、またはない場合や参加費を別途徴収することが困難な場合がしばしばあります。収穫したお米を収穫祭で保護者に販売して、その代金を苗の購入費などに充てたり、参加者の草取り作業を労賃の軽減として捉える方法もあります。

また、【一般参加型】では、参加者から参加費を徴収する場合、年会費として徴収しているところもあります。企業・団体からの協賛金や行政からの補助金などを受ける場合、参加者から徴収する参加費が安く収まることがありますが、体験にかかる費用について正しく理解してもらう意味からも、協賛金や補助金を受けていることを参加者に対して伝えることも重要です。

表1-4 運営に関する様々な悩み

資金面	活動を続けていく予算の確保が困難
	資金を調達するのが大変。（参加する）園児の数も少なくなっているのに、保護者への負担も心配
	溝、井戸などがなく、水道水を使わざるを得ない
	児童の園場への移動費用がかかる
人員面	学校の教職員の異動があっても、活動を継続できる体制を構築するのが難しい

（本事業で行われた調査より抜粋）

● 活動の継続体制について

特に学校では、教職員の異動があっても継続できる体制をつくるのが大切です。年間プログラムなど、実施内容のノウハウをまとめたものをつくり、学校内で共有してもらうとよいでしょう。

column

農林漁業体験と教科学習との関連

学校で行う農林漁業体験は、生活科や総合的な学習をはじめ、国語、算数、理科、社会、図工などの様々な教科等と関係しています。【学校型】の教育ファームを実施する際は、体験がどの学習と結びつくかを生産者も知っておくと、学校と連携しやすくなります。

農林漁業体験と教科等との関連（例）

関係する教科等	学習内容	体験で学ぶこと
生活科 総合的な学習	伝統と文化、環境など各学校で設定	農村の伝統行事、食文化、生きものを育みながら行う農業等
国語	小学校 5 年「活動したことを伝える文章を書こう」	一連の体験の学習について、人に伝えたいことを文章に書きとめる。さらに生産者、保護者などを招き発表会を開催することで学びが深まる
算数	小学校 4 年「面積の測り方と表し方」 「面積の単位」	圃場の長さや幅から面積の求め方を知り、広さを実感できる
理科	小学校 3 年「植物の育ち方」 小学校 4 年「季節と植物のようす」	野菜の生長の仕方を農作業の一連の流れで知る
	小学校 5 年「植物の実や種子の育て方」	野菜を育てることによって花と実の生長や受粉のしくみなどを知る
	小学校 5 年「人や動物の誕生」	牛の出産や搾乳から人や牛の誕生を知る
社会	小学校 5 年「日本の農業と食料生産」	圃場での体験から日本の農業の現状と問題点を知るとともに、生産者の工夫、苦労、喜びに気づく
家庭科	小学校 5 年「米飯の調理実習」	収穫祭などでごはんを炊く、餅をつくことで調理技術を身に付ける
図工	絵を描く	体験したことを絵に描くことで表現力を高める
英語	英単語などを学ぶ	農作業や農作物の名前を英語で学ぶなど（まだ取組例は少ないが、人気がある）